

乳幼児教育相談(けやきルーム)における関係機関との連携の取組

～保育所や療育機関との勉強会の運営を通して～

須藤 広代・林 徳子・山縣 浅日・杉山 砂寿・山中 健二

乳幼児教育相談に通っている子どもの中には、保育所や療育機関を利用している乳幼児もいる。保護者から利用機関への助言を依頼されたり、各機関の保育者から聴覚に障害のある子どもとの関わり方に悩みをもって日々保育をしているとの声を聞いたりすることも多い。本校乳幼児教育相談では、令和5年度から保育所や療育機関と勉強会を開催している。本研究では、聴覚障害のある乳幼児が利用する関係機関との連携、情報発信の内容や方法について示唆を得るため、オンラインと参集で開催した勉強会の内容や課題について検討した。

キー・ワード：乳幼児教育相談 オンライン勉強会 保育者

1 はじめに

本校の乳幼児教育相談（以下、けやきルーム）では、親子への継続的な支援に加え、親子が利用する関係機関との連携にも重点を置いている。

現在、けやきルームに通っている子どもの約半数が保育所や療育機関等（以下、保育所等）を利用している。

保護者を通じて、保育者から聴覚障害のある子どもへの関わり方や配慮等についての相談を受けるケースも増えている。具体的に相談に応じていくため、実際にけやきルームで当該親子の支援や保育を行っている担当者が対応をしている。相談に対する支援の形態としては、電話やメール、各機関への訪問、保育所等からの来校等様々であり、個々のケースに応じている。

保育者とのやりとりの中では「子どもがどれくらい、どんなふうに聞こえているのかを知りたい。」と尋ねられることが多い。近年、軽度・中等度難聴の乳幼児への補聴支援も増えていることから、補聴器や人工内耳（以下、補聴機器）の扱いに加え、聞こえにくいということについて、保育者に理解を深め、関わり方のポイントをつかんでもらえるような情報提供の必要性を感じた。そこで、令和5年度から「聞こえにくいお子さんと関わる保育者の勉強会」を実施し、けやきルームからの情報提供や参加者による情報交換を行ってきている。また、研修会には

ぜひ参加したいが、日常の保育の合間に研修に向く時間を作ることが難しいとの現場の保育者の声を受け、第1回、第2回は参加者が参加しやすいオンライン形式とした。第3回は、けやきルーム、幼稚園部、小学部の子どもの様子を実際に見てもらうために、本校での参集型で行う研修会とした。

本稿では、その取り組みの内容や課題について検討した経過を報告する。

2 目的

乳幼児期の支援の一環として始めた「聞こえにくいお子さんと関わる保育者の勉強会」について、企画や内容、課題等についてまとめ、今後の支援の充実につなげていくことを目的とする。

3 取り組みの実際

(1) 保育所等との連携について

現在、けやきルームでは、保育所等との連携として以下の内容を行っている。

- ・保護者や各機関からの要請による訪問及びけやきルームでの活動参観、電話相談等（随時）
- ・「聞こえにくいお子さんと関わる保育者の勉強会」（年3回）
- ・「聴覚障害早期教育公開研修会」（年1回 「聞こえにくいお子さんと関わる保育者の勉強会」の第3回とあわせて開催）

(2) 保育所等へ通っている子どもの割合

令和6年度9月時点で、保育所等に通っている乳幼児の割合は、0歳児が27%、1歳児が50%、2歳児が65%だった（Table.1）。年齢が上がるにつれ、保育所等を利用する割合は増えている。これは、育児休業が明けて保護者が職場復帰する時期と重なっている。

Table.1 保育所利用児の割合

	0歳児	1歳児	2歳児
全体の人数	18名	22名	29名
保育所 利用児	5名	11名	19名
割合	27%	50%	65%

(3) 保育者の勉強会について**① オンライン形式と参集型の勉強会（全3回）**

参加者の多くは、聴覚障害のある子どもの保育が初めてであった。そこで、第1回、第2回のオンライン形式の研修では、聴覚障害の基本的な知識や関わり方、日常の保育現場ですぐに役立つような補聴機器の扱いや仕組み等を伝えた。そして、第3回の本校での参集型の研修では、けやきルーム（0～2歳児）と幼稚部（3～5歳児）の保育、そして小学部の授業の参観を計画し、具体的な関わり方と子どもの成長の姿を実際に見てもらった機会とした。

また、継続的に研修に参加してもらえるように、1回目と2回目の情報提供の内容を変え、続けて参加する毎に新しい情報に触れることができるようにした。さらに、第2回からの参加者には、第1回で話題になったことや情報提供の資料もあわせて配付し、いつ参加しても、参加者同士が共通の話題で情報交換できるようにした。

② 参加者

より具体的な姿を思い浮かべながら的確な支援方法を伝えることができるように、けやきルームに通っている子どもが利用している保育所等を対象とした。

参加者全員が聞きたいことや園での取り組み等

を話せるように人数を考慮し、定員は15名程度とした。

③ 開催時間

第1回、第2回のオンライン形式での勉強会は、比較的参加しやすい時間帯として、14時から15時半までとした。

④ 事前アンケートの実施

参加者のニーズを把握するために、本勉強会で聞いてみたいことについて、自由記述での事前アンケートを実施した。さらに、勉強会当日にも、聞いてみたいことを受け付ける時間を設けた。

⑤ 情報提供の内容

事前アンケートから、参加者のニーズと担当乳幼児の年齢や実態を踏まえ、日々の保育ですぐに実践できる内容で構成した。

(4) 令和5年度第1回勉強会（オンライン形式）について

13施設から16名の参加があった。

事前アンケートで、参加者からは、子どもがすぐに補聴器を外してしまう場合の対応の仕方や日常の保育の場面ですぐに実践できる関わり方等についての質問があった。

そこで『聞こえにくい』ってどういうこと？』というテーマで、聴覚障害のある子どもの聞こえや子どもとの関わり方を中心に情報提供をした。

また、日常の保育の場面ですぐに実践できる関わり方として、けやきルームで実践している絵本の読み聞かせや手遊び歌、絵カードを使った伝え方の実演も行った。

以下に、参加者の質問に対する回答の一部を示す。

- ・子どもが補聴器を外してしまう場合は、「取っちゃだめだよ。」等と叱らず、さりげなく受け取り、様子を見ながらつけ直すようにする。子どもは楽しいことに気持ちが向いている時につけていられることが多い。どうせすぐに外してしまうからとあきらめてしまわずに、「補聴器を装着していく」という大人の気持ちはぶれないようにすることが大切である。

① 成果

- ・全ての参加者から質問や各園での取り組み、工夫等について具体的な話を聞くことができた。
- ・保育者が保育ですぐに取り入れられる内容を提供することができた(Fig. 1)。「絵本を読む時は、読み手の表情や口元が見えるように絵本を顔の横に持ってきて話す」といった情報提供の内容を実演して見せることで、内容がより伝わりやすくなった。

② 課題

- ・聴覚障害のある子どもとの関わり方への理解が深まっていくためには、今後も継続的な情報提供が必要である。情報提供の内容については、聴覚障害教育の視点から知っておいてほしいことを一方的に伝えるのではなく、保育現場からの具体的な悩みや疑問に応じながら、日常の保育の中でできることを共に考えていけるように構成していくことが大切である。今後も継続的に、日常の保育の中で工夫できること等、関わり方に関する内容を繰り返し伝えていくことが必要である。



Fig. 1 絵本の読み聞かせの実演

(5) 令和5年度第2回勉強会（オンライン形式）について

15施設から16名の参加があった。第1回から7名が継続して参加し、新たに9名の参加があった。事前アンケートで、参加者からは、日常の保育の活動内容によって配慮することは何か、また、補聴機器について周囲の子どもにどのように説明したら良いか、また、保育者や友だちとの関わりの中でどこまで言葉を聞き取れているのか、等といった質

問があった。

そこで、「聞こえにくいお子さんのことばの育ちと関わり方」というテーマで情報提供を行った(Fig. 2)。

Fig. 2 情報提供資料一部
「話し手に注目するような働きかけ」

以下に、参加者の質問に対する回答の一部を示す。

- ・子どもは、聞こえにくさがあっても、音楽を楽しむ。音楽の理解の仕方は聞くことだけでない。手拍子や振りをつけたり、子どもから周囲の様子が見えるような位置の配慮をしたりして視覚的な手がかりを取り入れていくことが大切である。子どもは聞き取りづらかったり、間違ふことを不安に思ったりすることもある。苦手意識をもっている場合は、子どもに応じた手がかりを添えながら、できることを少しずつ増やしていくことが大切である。
- ・保育所の子ども達は補聴機器を見て素直な気持ちで「これは何?」と質問してくる。その場合は、分かりやすいように、「補聴器は大事なもの」「よく聞こえるようになるもの」等と伝えると良い。

① 成果

- ・第1回から継続して参加して下さった方々がいた。
- ・質問への回答後、数名からさらに質問があり話し合いが深まった。オンライン終了後に電話での問い合わせがあり、対応したケースもあった。

② 課題

- ・参加者からの質問が第1回よりも増えたことで、情報提供に時間がかかった。参加者同士のやりとりの時間をもっと増やしたい。

30 乳幼児教育相談（けやきルーム）における関係機関との連携の取組

・参加者からの質問は、担当している子どもについての具体的な質問が多くなる。子どもの実態が異なり、内容によっては全体での共有が難しかった。質問への対応の仕方や全体への共有の仕方について今後検討が必要である。

(6) 令和5年度第3回勉強会（参集形式）について

第3回は、毎年本校で行っている「聴覚障害早期教育公開研修会」とあわせて参集型で行った。この研修会は、医療・福祉・教育関係者も対象としており、参加者数は全体で40名であった。午前は、実際の活動場面の参観を行った。参観は、けやきルームだけでなく、幼稚部や小学部も行い、成長した子どもたちの様子も見てもらった。午後は、千葉市にある難聴児対象の療育センターとけやきルームからの情報提供、パネルディスカッションを行った。医療・福祉・教育など職種の異なる参加者で意見交換を行った。

① 成果

・第1回、第2回で情報提供した子どもとの関わり方について、実際の指導場面を見てもらうことができた。

・医療・福祉・教育それぞれの視点から、子どもや保護者の支援について多角的に話すことができた。

② 課題

・参加者が多職種になったことで、意見交換の内容が多岐に渡った。そのために、第1回、第2回と比べて、保育に関する具体的な情報が少なかった。多職種が意見交換できる貴重な場であることを踏まえつつも、多職種がバランスよく意見交換できるように内容を検討していく必要がある。

(7) 令和6年度第1回勉強会（オンライン形式）について

19施設から24名の参加があった。昨年度から9名が継続して参加し、新たに15名の参加があった。参加者からは、事前アンケートで、集団生活の中での聞こえ方や聞こえにくい子の言葉の発達等について質問があった。

そこで「聞こえにくい子の言葉の理解について」というテーマで情報提供を行った（Fig. 3）。

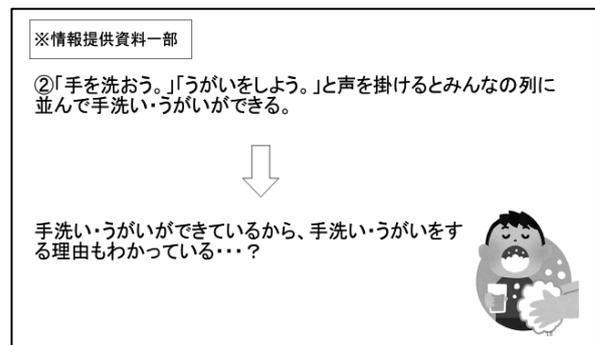


Fig. 3 情報提供資料一部

「行動の意味を分かっているかな？」

以下に、参加者の質問に対する回答の一部を示す。

- ・生活習慣を整えることは、言葉の習得にもつながっていく。生活リズムが整ってくると、子どもの中で活動の見通しがもてるようになっていく。毎日、その場に合った言葉をかけられることで行動と言葉がつながってくる。
- ・子どもの集団の中での聞こえ方や理解の確認について、周囲の大人が気をつけていくことは非常に大切である。しかし、きちんと伝わっているかの確認に力が入りすぎたり、大丈夫かなと不安そうな表情を見せたりすると子どもも不安になる。子どもにわかる関わりの基本を押さえ、素敵な笑顔で関わっていくことが大事である。

① 成果

- ・参加回数を重ねた参加者の事前質問の内容がより具体的になってきた。初めての参加者であっても、けやきルームの担当者が訪問を行っている保育所は、担当者からの助言を受けて実践したことやそこから感じた疑問についての質問が多かった。
- ・質問に関連して、過去に同じような経験があった参加者から、その時の園での取り組みについて情報提供があったり、同じ悩みをもっている参加者同士で情報交換をしたりすることができた。

② 課題

- ・参加者は担当年齢が異なったり、同じ年齢でも実態が大きく異なったりするケースもある。そのため、

年齢別（0、1、2歳児）の活動や実態に応じた支援方法の具体例の示し方を検討していくと良い。

(8) 令和6年度第2回勉強会（オンライン形式）について

12施設から17名の参加があった。前回から15名が継続して参加し、新たに12名の参加があった。事前アンケートで、参加者からは、聞こえにくい子どもが安心して過ごせる環境作りはどう考えたらよいか等の質問があった。

そこで「聞こえにくい子どもの立場から考える」というテーマで情報提供を行った（Fig.4）。

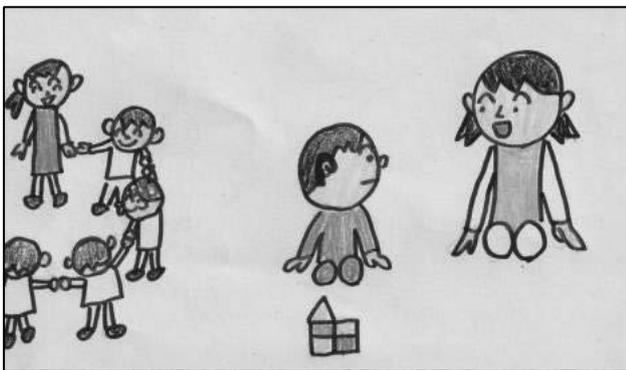


Fig.4 情報提供資料一部
「子どもの気持ちを代弁する」

以下に、参加者の質問に対する回答の一部を示す。

- ・集団の中で聞こえにくい子どもが集団に入らない状況では、「なにをどうしたらよいかわからない」などの不安を抱えていることが多い。一つずつわかることや楽しい経験を積んでいくことで仲間に入っていけることもある。今、その子がどんな目線でどんなことを考えているかを細かく見ていくことで原因がわかっていく。

① 成果

- ・けやきルームでの関わり方や実際に使用している教材の例を繰り返し伝えてきたことで参加者がそれらを参考にし、保育を実践していることがわかった。
- ・子どもの立場から考えることをテーマにしたことで、実際の保育の場での子どもの様子と関連付

けて考えやすかったとの声が多く聞かれた。

② 課題

- ・今後も、実際の保育の場での子どもの様子と関連付けて考えられるテーマの設定や、年齢や言語発達の実態に応じた関わりの具体例についてさらに検討を継続していく必要がある。

4 まとめと今後の展望

本勉強会を通して、保育現場の声を実際に聞き、保育と聴覚障害教育のそれぞれの視点を生かしながら、日常の保育の中で取り組めることと集団保育の場では難しくなることを一緒に考えていく必要性を感じた。

一日の長い時間を保育所で過ごす子どもが増えている。聴覚障害のある子どもが、補聴機器を常時装着して、聴覚を活用していくためには、保育所等の理解と協力が不可欠である。保育所等へ聴覚障害について情報提供をしていくことは、子どもだけでなく、保護者への支援にもつながっていくと考える。保育所等との連携や情報提供の在り方について、参加者のニーズを含め、「勉強会の内容の充実」「勉強会以外の支援方法」「保育者がさらに情報を求めようと思えるようなけやきルームにするためのわかりやすい情報提供の仕方」を検討していきたい。

[付記]

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けたものである。

[参考文献]

- 福島朗博（2022）浜田ろう学校早期教育公開研修会資料「乳幼児の心とことばを育む～親子のやりとりの支援～」
- さっぽろ子どもの聞こえ相談ネットワークを作る会（2017）「こどものきこえ小百科～小児難聴の発見と支援」